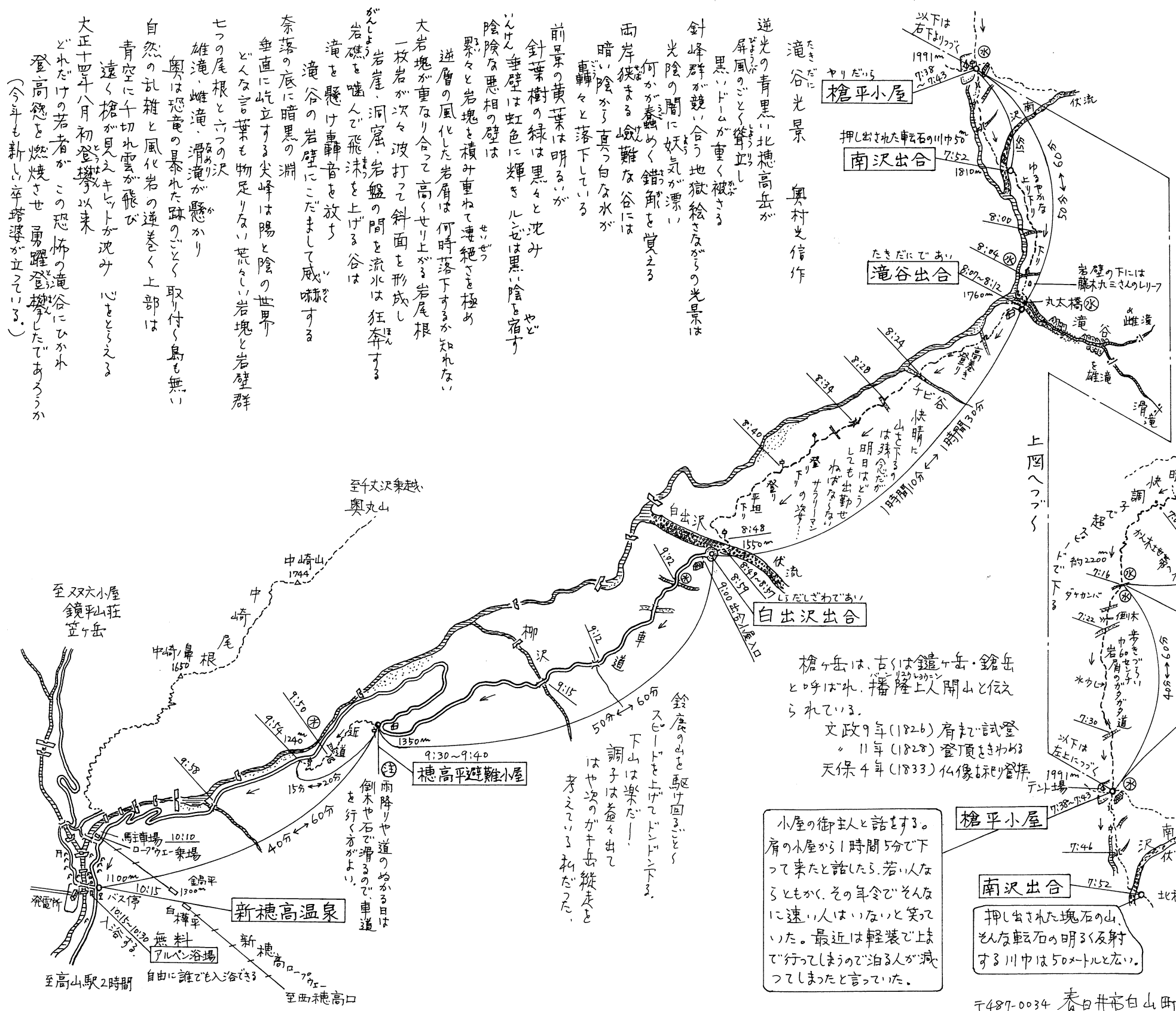


槍ヶ岳・槍ヶ岳山荘～槍平～新穂高温泉

S54.9 槍ヶ岳開山150周年を祝う。

槍ヶ岳鑓尾根の中で最後まで登山者と拒絶してきた北鑓尾根の初登攀は、大正11年(1922)7月7日、早大パーティーが山頂から独攀まで往復、学習院パーティーは末端Pから完登したという。ドラマチックな幕明けとした北尾根では、昭和11年(1936)1月、加藤文太郎が雪積の中に埋もれて遭難し、さらに昭和24年(1949)1月、松澤明と有元克己が吹雪の中で4丈沢に滑落し、壮絶な遭難が起きている。今でも厳冬の縦走は零下25℃の寒気と豪雪、岩凌との死闘であることは間違いない。

S56.9.15(火)快晴-2℃
(1泊2食4400円)朝下山
朝縦走する白土さん(別冊)
朝縦走する白土さん(別冊)



逆光の青黒い北穂高岳が屏風のように見える。黒いドームが重く被さる。針峰群が競い合う地獄絵巻な光景は、光陰の間に妖気が漂い、何かが蠢めく錯覚を覚える。兩岸狭まる、険難な谷には暗い陰が直つ白な水が、車輪々と落下している。前景の黄葉は明るい。針葉樹の緑は黒々と沈み、いんげん、垂壁は虹色に輝き、ルンゼは黒い陰に宿す。陰険な悪相の壁は、累々と岩塊を積み重ねて連絶を極め、逆層の風化した岩層は何時に落下するか知れない。一枚岩が次々波打つ斜面を形成し、岩崖、洞窟、岩盤の間を流水は狂奔する。岩礁を噛んで飛沫を上げる谷は、滝を懸け車輪音を放ち、滝谷の岩壁にこだまして威嚇する。奈落の底に暗黒の淵、垂直に屹立する尖峰は陽と陰の世界、どんな言葉も物足りない荒々しい岩塊と岩壁群、七つの尾根と六つの沢、雄滝、雌滝、滑滝が懸かり、奥は恐竜の暴れた跡のごとく取り付く島も無い、自然の乱雑と風化岩の逆さく上部は、青空に千切れ雲が飛び、遠く槍が見えキリッとした心もとろえる。大正十四年八月初登山以来、どれだけの若者がこの恐怖の滝谷にひかれ、登高熱を燃焼させ、勇躍登攀したのであろうか。(今年も新しい卒塔婆が立っている。)

槍ヶ岳は、古くは鑓ヶ岳・鎗岳とゆずれ、播磨上人開山と伝えられている。
文政9年(1826)府村試登、11年(1828)登頂をきわめ、天保4年(1833)14像を祀り登攀。

小屋の御主人と話をす。肩の小屋から1時間5分下って来たと話したら、若い人らしくも、その年令でそんなに速い人はいないと笑っていた。最近では軽装で上まで行ってしまうので泊る人が減ってしまったと言っていた。

槍平小屋
南沢出合
押し出された塊石の山、そんな転石の明るく反射する川中は50メートルと広い。